



お品書き

【その巻】 CODEレター VOL.31

【その式】 プロジェクトニュース

以上

CODE

Letter

2006.9.23 VOL.31

(特活) CODE海外災害援助市民センター発行
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10

TEL: 078-578-7744 FAX: 078-574-0702

e-mail: info@code-jp.org URL <http://www.code-jp.org/>

郵便振替: 00930-0-330579

「砂浜での失敗」

理事 藤野 達也

(PHD協会総主事代行

関西NGO協議会代表理事)

この夏インドネシアのスマトラに出かけた。訪ねた先は西スマトラ州のインド洋に面した漁村。村人に聞けば、04年11月の地震の折に、揺れはしたが幸い大きな被害はなく、津波もたいしたことはなかったという。

この村は人口2千人ほどである。日本で想像する漁村の様子とは違い、小さければ2、3人乗り、大きくても10人乗りぐらいの左右に浮きの役割をする木片がついた木造船を漁が終わるたびに、砂浜に人力で引き上げている。夜が明ける頃に海に出て、昼に戻ってくる。小さな船は櫓で漕ぐが、帆を張る。大きめの船には船外機をつけている。冷蔵設備もないので、魚が悪くなる前に、浜に戻ってくるやり方がずっと続いている。小さいとはいえ、毎度その船を浜に引き上げるのは大変な仕事。何人もの漁師が担いだり押したりで、やっと。この負担をなんとかしようと、ここ数年、この浜に港をつくる工事がすすんでいた。一帯が砂浜なので、浜を掘って港を作ろうとしてもキリがないので、近くを流れる川の片側をコンクリートで固め岸壁とし、そこに海から船を入れ、繋ぐ予定で工事が行われていた。またその岸壁の端には、水揚げした魚をセリにかけるためのりっぱな建物もできあがっていた。

この一連の計画は現地の漁師による組合の要望を州政府に申請し、認められたものである。着工に先だつ調査の段階で、日本の専門家も関わったと聞いたが、全体としては国際協力できあがったというよりは州政府によるプロジェクトのようではある。昨年訪ねた

際には、この計画について期待いっぱいの説明を村人からうけて帰った。ところが、今回、目に入ったのはコンクリートがひび割れて使いものにならなくなっている無残な岸壁だった。まるで震災後のメリケン波止場。土台が砂地なのでたった一年で崩れてしまったのだ。さらに河口には砂が堆積し、満潮時にはかろうじて船を入れることができるが、干潮時は全く動かせない状態である。小さい船なので、人を乗せなければ押したり、引いたりして、かろうじて移動させられるが、まだ砂が溜まる前に川に引き入れていた政府の支援で手にいれた大きい船2隻はどうにも動かせず、川の中で無用の長物になりさがっている。

近年、復興や開発に関するこの種のプロジェクトをすすめる際には、住民の声がどれだけ反映しているかが重要とされているが、それはここでは十分に達成されていた。表面的な体裁なら素人にもわかる。でも中身についてはわからない。この失敗の原因は、専門的な調査が十分でなかったことにあるのは明らかである。

CODEも土木・建築系の支援を行うことがある。様々な市民の働きが活動の中心であっても、技術的なところでは専門家の役割が重要であることをこの浜の現状から再認識した。多くの方からの支援をムダにしないために。

8/24 国際機関訪問ツアー

8月24日にHAT神戸で国際機関訪問ツアーを開催し、アジア防災センター、国連人道問題調整事務所、国連地域開発センター防災計画兵庫事務所、JICA兵庫を訪れました。

参加者は、大学生を中心に高校1年から60代の介護士まで12名で、それぞれの興味を持って参加したせいか、各機関の説明を熱心に聞いておられました。皆さんの感想を少しご紹介します。

- ・それぞれの機関の役割、関連性など全体を見渡したオリエンテーションがあるとよかった。
- ・世界の災害被害の9割がアジアに集中しているということを知らなかったが、日本、神戸が国際的な防災協力活動を発信しているということが分かってよかった。
- ・”回り道をする、社会人としての基礎を身につける、必要以上のこだわりを捨てる”というアドバイスをいただいて、今回のツアーに参加した意味が十分にあると思った。
- ・非常時の調整のためには、日常的にコミュニケーションが取れていることが必要との言葉が印象的だった。
- ・国際的にはまだ、内戦や宗教紛争などが絶えず、反政府勢力が支配する地域への援助活動は難しいという現実があることを知り、これからもっと世界情勢も含め、色々なことに関心を持っていきたいと思う。
- ・教育開発に興味あるので、インターンしたいと思った。防災と教育開発を関連させて考えたことがなかったので、新しい視野だった。
- ・「一つの村によい例があったら、他の村もまねをする。一つの国があることに成功したら、周りの国もできるのではと挑戦する」お金や援助があるからだけではなく、よい活動に人々が刺激されて動くということを学んだ。
- ・地域に根付いたコミュニティ支援について、もっと深く知りたいと思った。
- ・自分では手を出さず現地の人というものが、あちこちで聞くキーワードだと思った。
- ・全てを見終わり、感じたことは、政府レベルでの国際協力地域と密接にかかわる協力、人を通じた国際協力など様々な形があるということ。実際に働いている人から話が聞けたのは本当によかった。できたら、NGOレベル、国連レベル、行政レベルなど違ったアプローチをしているところのことを知って、今後自分がどのような形で国際協力に関われるのか考えたい。
- ・各国際機関が具体的にどのような活動を行っているのかを知るよい機会になった。私も何かできることから少しずつボランティアやインターンなどで国際協力に参加したい。
- ・1機関1時間という範囲内では仕方ないかも知れないが、参加者との、あるいは参加者同士の対話型を目指した方がimpressiveかつeffectiveになるはず。

活動記録 7/15 ~ 9/15

- 7月16日 コープこうべ西宮地区平和の集い(村井・細川)
ボランティアの日(CODE Letter 30号発行)
<7月17日 ジャワ島西部地震・津波発生>
- 7月21日 防災士研修 高松会場(村井)
- 7月23~31日 ジャワ島中部地震第2次調査(村井・横山)
- 7月28日 ジャワ島中部地震第1次調査報告
(神戸工業高校)(吉椿)
- 8月4日 防災士研修 福知山会場(村井)
飯塚さん送別会
- 8月9~13日 スマトラ沖津波第9次調査(村井・岡本)
- 8月14~23日 パキスタン地震第3次調査(村井・岡本)
- 8月18日 コープこうべジャワ地震支援金贈呈式(芹田)
- 8月22日 ジャワ島中部地震 神戸大学報告会(横山)
- 8月23日 スリランカYMCAより研修生来訪(村井)
- 8月24日 国際機関訪問ツアー(細川)
- 8月27日 防災士研修 大津会場(村井)
- 9月1日 防災士研修 伊予会場(村井)
- 9月14日 9月度理事会

ありがとうございます 7/11 ~ 9/15

会員・寄付者ご芳名(以下順不同・敬称略)

一般寄付

- ・個人：塚本謙三、中谷勇一(以上兵庫)、成毛典子(東京)、阿部千鶴江(千葉)、村松芳彦(静岡)
- ・団体：(株)共立サービス(兵庫)

会員

正会員

- ・個人：大谷成章(兵庫)

賛助会員

- ・個人：高橋智子、中谷勇一、白水土郎、上田耕蔵、鈴木嶺、山本佳子、中山恵三、広川嘉宏(以上兵庫)、細谷祐司(奈良)、古木京子(東京)
- ・団体：日本木造住宅耐震補強事業者協同組合(東京)(特)阪神高齢者・障害者支援ネットワーク(兵庫)



プロジェクトニュース

・インドネシア (ジャワ)
・スリランカ ・パキスタン

CODE海外災害援助市民センター
〒 652-0801 神戸市兵庫区中道通 2-1-10
Tel: 078-578-7744 Fax: 078-574-0702
e-mail: info@code-jp.org
URL: http://www.code-jp.org/

ジャワ島・・・(2006年6月～)

エコ・プロジェクト

バントゥール県バングタパン群ウィルケルテン村ポトクンチェン集落を対象に、8月より耐震住宅再建プロジェクトが開始されました。この集落は、ヤシの木の後ろに隠れているため、壊滅的な被害を受けている地域であるにも関わらず、支援が届いていなかった地域です。村人のほぼ全員の住宅が全壊しており、現在はテントでの生活をしています。

ここで再建する住宅は、集落の近くで簡単に手に入れる木材や竹を使います。“地域の素材で作った家はその土地によく馴染み、強くなる”と語られています。今回の地震では、崩れた家の資材がほとんど無傷なことが特徴なため、再利用できるものはできるだけ再利用します。被災の大きさは震度が原因ではなく、建築構造の弱さが原因だったようです。

そして、住宅再建は大工を雇わずに、村人たちがボランティアで力を合わせて“次の地震に備える強い家”を作り上げていきます。「これらのプロセスを越えて、集落の結束がより強くなっていくことが期待されている」と現地協力者のエコ・プラウオットさんは話してくれました。

エコさんは竹木材を利用した建築の専門家で、故口モ・マングンという芸術家(作家兼建築家)の弟子です。故口モ・マングン氏とは、ジョグジャカルタのスラム開発に取り組んだ方で、“川沿いのスラムに魔法を吹きかけ、竹一杯のバンブーハウスの町に変えた”と人々に語られる有名な活動家の一人です。エコさん一同は、その師匠の意志を受け継ぎ、現在、被災したコミュニティを歩き続けています。被災地へ“希望”を届け、住宅再建のみならず“暮らし”を再建する活動に取り組んでいます。

このエコさんの名前と“環境を配慮した建築素材を利用する”意味合いを語呂合わせにして、この住宅再建支援を“エコ・プロジェクト”と名付けました。



スリランカ津波復興支援(2004年12月26日～)

8月10日から13日まで、CODEが支援しているスリランカのプロジェクトの現場を訪問しました。

幼稚園・保育園再建プロジェクト

CODEは、スリランカの津波被災地で6軒の幼稚園建設の支援を行っています。そのうち、南部のヒッカドウワ、ウェリガマ、マータラの3つの幼稚園を訪れました。

・ヒッカドウワでは1階部分を建設中で、12月には開園の予定。70人の園児がいます。

・ウェリガマでは、9割方完成していて、もうすぐ開園です。

・マータラは今年1月に完成し、約30人の園児が学んでいます。

他の3つは、現在治安が悪化している地域にあるので行くことはできませんでしたが、1つは完成しており、2つはこれからの建設が期待されます。



漁業支援プロジェクト

南部のハンバントータ県のクダワラという漁村で、漁業組合の支援を行っています。津波によって、漁村の漁師たちは漁の道具を失い、生計手段を奪われました。そこで、CODEは現地のU F F Cという団体と協力して漁業組合を設立しましたが、今回、その組合を訪ねました。

CODEが漁業組合に支援したのは一隻のボート。そのボートで、交代で漁に出ています。漁で儲けたお金のいくらかは組合に還元し、それで夜の漁のためのランプを買ったりしています。残念なことに、今回行ってみるとボートは故障中でした。燃料が空なのにエンジンをかけたそうで、部品が砕けてしまったのです。今は銀行のローンを借りて修理中だそうです。今後のために保険に入ったと言っていました。

他の支援団体の中には、何隻も船を漁師に無償で渡しているところもありますが、CODE支援について、組合の代表はこう言ってくれました。

「CODEは個人にではなく、この漁業協同組合というコミュニティに対してボートを支援してくれた。もし個人に船を挙げていたら、その人だけが豊になり、社会に不和が生まれてしまうだろう。だから、たった1隻のボートだけれど、このようにコミュニティが協力して強くなれる方法は良かった」



パキスタン地震復興支援（2005年10月8日～）

昨年10月8日に起きたパキスタン地震以来、CODEは現地パートナーを探し、支援を考えてきました。今回、8月14日から21日まで、東北部国境地域に位置するアザド・カシミール州の州都ムザファラバードに滞在し、現地コミュニティ団体と支援に関するミーティングを重ねました。

ムザファラバード市の中心街に位置する第13地区は、地震によって9割の建物が倒壊するというひどい被害を受けました。もともと狭い区画に家がひしめきあっていて、家族が増えると3階建、4階建というように上に増築していったそうです。そのようなもろい家々が崩れ、ガレキとなって細い路地に3メートルほども積もっていたそうです。その街を、今春、JICAの支援を受けたコミュニティ団体が中心となってきれいに片づけました。今ではすっかり、とはいきませんが、主な道は通れるようになっています。

しかし、依然としてテント暮らしをしている被災者は多く、そういった人々は自力で家を再建することが困難だと言います。政府の対応を待ち続けているけれど、それもあてにはできず、焼けるような夏の暑さに耐えながら次の冬が来るのを恐れています。日々の暮らしは賄っていけるけれど、住宅のような大きな投資をするのは難しい、と言います。

今回このコミュニティ団体と話し合いながら、CODEは第13地区で女性の自立支援センター等の建設を通して、コミュニティ再建支援をする方針です。



*それぞれのプロジェクトについては、ホームページで詳細を掲載しております。またご質問やご不明な点がありましたら、何なりと事務局までお問い合わせ下さい。